

Kokoro – Sensei’s Testament – Parts 37-46 (Natsume Sōseki)

さんじゅうしち
三十七

「二人は各自の室に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝と考え込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機が後れてしまったという気も起りました。なぜ先刻Kの言葉を遮って、こっちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手落りのように見えて来ました。せめてKの後に続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまったら、まだ良かったろうにととも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となって、こっちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切の襖を開けて向うから突進してきてくれれば好いと思いました。私にいわせれば、先刻はまるで不意撃に会ったも同じでした。私にはKに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前失ったものを、今度は取り戻そうという下心を持っていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまで経っても開きません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私の頭は段々この静かさに掻き乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になって堪らないのです。不断もこんな風にお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あったのですが、私はKが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと見なければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開ける事ができなかつたのです。一旦いいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつたのです。

しまいには私は凝としておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立って縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という

もくてき てつびん ゆ ゆのみ つい いっぱいの げんかん
目的もなく、鉄瓶の湯を湯呑に注で一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざと
Kの室を回避するようにして、こんな風に自分を往来の真中に見出したのです。私には無論
どこへ行くという的もありません。ただ凝としていられないだけでした。それで方角も何も
構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻ったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でい
っぱいになっていました。私もKを振り落とす気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分
から進んで彼の姿を咀嚼しながらうろついていたのです。

だいち かい おとこ み とつぜん う あ
私には第一に彼が解しがたい男のように見えました。どうしてあんな事を突然私に打ち明けた
のか、またどうして打ち明けなければいけないほどに、彼の恋が募って来たのか、そうし
て平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は
彼の強い事を知っていました。また彼の真面目な事を知っていました。私はこれから私の取る
べき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもっていると感じました。
同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったのです。私は夢中に町の中を歩
きながら、自分の室に凝と坐っている彼の容貌を始終眼の前に描き出しました。しかもいく
ら私が歩いても彼を動かす事は到底できないのだという声はどこかで聞こえるのです。つまり
私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に崇られたのではなからう
かという気さえしました。

つか うち かけ とき いぜん ひとけ しず
私が疲れて宅へ帰った時、彼の室は依然として人気のないように静かでした。

さんじゅうはち
三十八

わたくし いえ ま くるま おと き いま ゴムわ じぶん
「私 が家へはいると間もなく 俥の音が聞こえました。今のように護謨輪のない時分でした
から、がらがらいう厭な響きがかなりの距離でも耳に立つのです。車 はやがて門前で留まり
ました。

ゆうめし よ だ さんじゅうぶん た あと こと おく
私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さん
とお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。二人は遅くな
ると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰って来たのだそう
です。しかし奥さんの親切はKと私とに取ってほとんど無効も同じ事でした。私は食卓に坐り
ながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお
寡言でした。たまに親子連で外出した女二人の気分が、また平生よりは勝れて晴れやかだ

ったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪かったのです。すると今度はお嬢さんがKと同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。私はその時ふと重たい顔を上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があったのです。Kの唇は例のように少し顫えていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとしか思われぬのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだろうといいました。Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやといって、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕元に坐って、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖ためるがいいといいて、湯呑を顔の傍へ突きつけるのです。私はやむをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転させるだけで、外に何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣の室で何をしているだろうと思ひ出しました。私は半ば無意識においと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖ごしに聞きました。もう寝るという簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて聞きました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経ったと思う頃に、押入をがらりと開けて、床を延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時かとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈をふっと吹き消す音がして、家中が真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴えて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝彼から聞いた事について、もっと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこっちから切り出しました。私は無論襖越にそんな談話を交換する気はなかったのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻から二度おいと呼ばれて、二

度おいと答えたような素直な調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはっと思わせられました。

さんじゅうく
三十九

「Kの生返事は翌日になっても、その翌日になっても、彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色を決して見せませんでした。もっとも機会もなかったのです。奥さんとお嬢さんが揃って一日宅を空けでもしなければ、二人はゆっくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗に用意をしていた私が、折があったらこっちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙って家のものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振にも、別に平生と変わった点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心の本人にも、またその監督者たる奥さんにも、まだ通じていないのは慥かでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵えて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思って、例の問題にはしばらく手を着けずにそっとしておく事にしました。

こういってしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮の満干と同じように、色々の高低があったのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまさまの意味を付け加えました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかと思ってもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句、漸くここに落ち付いたものと思って下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかったのかも知れません。

その内学校がまた始まりました。私たちは時間の同じ日には連れ立って宅を出ます。都
がよければ帰る時にもやはりいっしょに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違
ったところがないように親しくなったのです。けれども腹の中では、各自に各自の事を勝手
に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞
いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じて
いるかの点にあったのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で
極めなければならないと、私は思ったのです。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けてい
ないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しかりました。私はK
の私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があったので
す。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺いていた
彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかったのです。私はそれがため
にかえって彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹
の中で否定する気は起りようがなかったのです。

私はまた彼に向って、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過
ぎないのか、またはその自白について、実際の効果をも収める気なのかと問うたのです。し
かるに彼はそこになると、何にも答えません。黙って下を向いて歩き出します。私は彼に隠
し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す
必要はないと判然断言しました。しかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないの
です。私も往来だからわざわざ立ち留まって底まで突き留める訳にいきません。ついそれなり
にしてしまいました。

よんじゅう
四十

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す
光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引っ繰り返して見ていまし
た。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜら
れたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借
り替えなければなりません。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心
にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶもの
があります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上

に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人の邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちょっと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかというのです。私は少し待っていればともいいと答えました。彼は待っているといたまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があって、談判でもしに來られたように思われて仕方がないのです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち付き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向ってちっとも進んでいませんでした。彼は私に向って、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵に陥った彼を、どんな眼で私が眺めるかという質問なのです。一言でいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確認に認める事ができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他の思わくを憚るほど弱くでき上ってはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇気もある男なのです。養家事件でその特色を強く胸の裏に彫り付けられた私が、これは様子が違ふと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向って、この際何んで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいといいました。そうして退いているから自分で自分が分らなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるより外に仕方がないといいました。私は隙かさず迷うという意味を聞き糺しました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼

はただ苦しいといただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えて
いました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その
渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやったか分かりません。私はそのくらいの美しい同情
をもって生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

よんじゅういち
四十一

「私 はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の
眼、私の心、私の身体、すべて私という名の付くものを五分の隙間もないように用意して、K
に向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくら
いに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼
の前でゆっくりそれを眺める事ができたのも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打で彼を倒す
事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚に付け込んだので
す。私は彼に向って急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、
その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽だの羞恥だの
を感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といい
放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼
の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐
ではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその
一言でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺に生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近い
ものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しい
のは承知していますが、私はただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。
Kは昔から精進という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲という意味も籠って
いるのだろうと解釈していました。しかし後で実際に聞いて見ると、それよりもまだ嚴重
な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきものだ
というのが彼の第一信条なのですから、摂欲や禁欲は無論、たとえ欲を離れた恋そのもので
も道の妨害になるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞か

されたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑の方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kにとって痛いに違いなかったのです。しかし前にもいった通り、私はこの一言で、彼が折角積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にもどう影響するかを見詰めていました。

「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはぴたりとそこへ立ち留まったまま動きません。彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎょっとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしても彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして、徐々とまた歩き出しました。

よんじゅうに
四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せといった方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、お前は卑怯だと一言私語してくれるものがあつたなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるには余りに正直でした。余り

に単純たんじゆんでした。余りに人格じんかくが善良ぜんりやうだったのです。目のくらんだ私は、そこに敬意けいゐを払う事ことを忘れて、かえってそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒うたおそうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名なを呼んで私の方ほうを見ました。今度は私の方こんどで自然しぜんと足あしを留めまし
た。するとKも留まりました。私はその時やっとKの眼めを真向まむきに見る事ことができたのです。Kは
私より背せいのたか高い男おとこでしたから、私は勢いきおい彼の顔かおを見上げるようにしなければなりません。
私はそうした態度たいどで、狼おおかみのごとき心こころを罪つみのない羊ひつじに向けたのです。

「もうその話はなしは止めよう」と彼がいました。彼の眼へんにも彼の言葉ひつうにも変へんに悲痛ひつうなところが
ありました。私はちょっと挨拶あいさつができなかったのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は
頼たのむようにいい直なおしました。私はその時彼むかに向むかって残酷ざんこくな答こたえを与あたえたのです。狼すきが隙すきを見
て羊のどぶえの咽喉くら笛つへ食くい付くくように。

「止めてくれって、僕ぼくがいい出した事だじゃない、もともと君きみの方もから持ち出だした話だじゃない
か。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口くちの先さきで止めたって仕方しかたがあるまい。君
の心かくごでそれを止めるだけの覚悟いつたいがなければ。一体君は君の平生へいぜいの主張しゅちやうをどうするつもりなの
か」

私わたくしがこういった時とき、背せいのたか高い彼かれは自然しぜんと私まへの前に萎縮いしゆくして小ちいさくなるような感じかんがしま
した。彼はいつも話はなす通とおり頗すこぶる強情ごうじやうな男おとこでしたけれども、一方ではまた人いっぽう一倍ひといちばいの
正しょうじき直もの者ものでしたから、自分じぶんの矛盾むじゆんなどをひどく非難ひなんされる場合ばあいには、決けつして平気へいきでいられない
質たちだったのです。私は彼の様子ようすを見てようやく安心あんしんしました。すると彼は卒然そつぜん「覚悟かくご？」と
聞ききました。そうして私がまだ何なんとも答こたえない先さきに「覚悟かくご、——覚悟かくごならぬ事こともない」と付つ
け加くわえました。彼の調子ひとりごとは独言ひとりごとのようでした。また夢ゆめの中なかの言葉ことばのようでした。

二人ふたりはそれぎり話きを切り上げて、小石川こいしかわの宿やどの方に足ほうを向けました。割合わりあいに風かぜのない暖あたたかな
日ひでしたけれども、何なにしろ冬ふゆの事ことですから、公園こうえんのなかは淋さびしいものでした。ことに霜しもに打う
たれて蒼味あおみを失うしなった杉すぎの木立こだちの茶褐ちゃかつしやく色うすぐろが、薄黒そらい空こずえの中に、梢せなを並ならべて聳そびえているのを
振り返ふって見た時は、寒かえさが背み中さむへ嚙せなかり付かじいたような心つ持こころもちがしました。我々われわれは夕暮ゆうぐれ
本郷台ほんごうだいを急いそぎ足あしでどしどし通とおり抜ぬけて、また向むこうの岡おかへ上のぼるべく小石川たにの谷おへ下くだりたので
す。私はその頃ころになって、ようやく外がい套とうの下したに体たいの温味あたたかみを感じかん出したぐらいです。

急いだためでもありますが、我々は帰り路にはほとんど口を聞きませんでした。宅へ帰って食卓に向った時、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。奥さんはこの寒いのにといて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがります。私は何も無いが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌な挨拶はしませんでした。それから飯を呑み込むように掻き込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の室へ引き取りました。

よんじゅうさん
四十三

「その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊い過去があつたからです。彼はそのために今日まで生きて来たといつてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向つて猛進しないといつて、決してその愛の生温い事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちょっと踏み留まって自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す路を今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情と我慢がありました。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰つた晩は、私に取つて比較的安静な夜でした。私はKが室へ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机の傍に坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳した後、自分の室に帰りました。外の事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ましました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室に

は宵の通りまだ燈火が点いているのです。急に世界の変わった私は、少しの間口を利く事もできずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思って、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈の灯を背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえって落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をぴたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕の事を考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思いました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといいます。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然した返事もありません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちょうど同じ時間に講義の始まる時間割になっていたので、二人はやがていっしょに宅を出ました。今朝から昨夕の事が気に掛っている私は、途中でまたKを追窮しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日上野で「その話はもう止めよう」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

よんじゅうよん
四十四

「Kの果斷に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔な訳も私にはちゃんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしっかりと攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなか

で何遍も咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら揺き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかも知れないと思いだしたのです。すべての疑惑、煩悶、懊悩、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸のなかに畳み込んでいたのではなからうかと疑り始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。その時の私がもしこの驚きをもって、もう一返彼の口にした覚悟の内容を公平に見廻したらば、まだよかったかも知れません。悲しい事に私は片眼でした。私はただKがお嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果敢に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうと一閃に思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を極めました。私は黙って機会を窺っていました。しかし二日経っても三日経っても、私はそれを捕まえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待つて、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日ばかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はどうとう堪え切れなくなって仮病を遣いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで蒲団を被って寝ていました。私はKもお嬢さんもおいなくなって、家の内がひっそり静まった頃を見計らって寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物は枕元へ運んでやるから、もっと寝ていたらよかろうと忠告してくれました。身体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶の間で飯を食いました。その時奥さんは長火鉢の向側から給仕をしてくれました。私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈托していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

私は飯を終って烟草を吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢の傍を離れる訳にゆきません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりし

て、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと聞きました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うでなぜですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだといいました。奥さんは何ですかと聞いて、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分にはいり込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻った末、Kが近頃何かいいはしなかったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか」とかえって向うで聞くのです。

よんじゅうご
四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ」といってしまった後で、すぐ自分の嘘を快からず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと直しました。奥さんは「そうですか」といって、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでした。それでも少時返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてられません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰いたいのだ」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありましたが、私はそれを忘れてしまいました。男のように判然したところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話のできる人でした。「宜ござんす、差し上げましょう」といいました。「差し上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞ貰って下さい。ご存じの通り父親のない憐れな子です」と後では向うから頼みました。

はなし かんたん めいりょう かたづ きいしょ じゅうごふん
話 は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初からしまいまでにおそらく十五分と
かか かなかつたでしょう。おくさんは何の条件も持ち出さなかつたのです。親類に相談する
ひつよう あと ことわ たくさん ほんにん いこう およ
必要もない、後から断ればそれで沢山だといいました。本人の意嚮さえたしかめるに及ば
ないと言明しました。そんな点になると、学問をした私の方が、かえって形式に拘泥す
るくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが
じゅんじょ ちゅうい としき だいじょうぶ ふしょうち ところ こ
順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子
をやるはずがありませんから」といいました。

じぶん へや かえ こと わけ しんこう かんが へん きもち
自分の室へ帰った私は、事のあまりに訳もなく進行したのを考えて、かえって変な気持ち
になりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで
きたくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだと
いう観念が私のすべてを新たにしました。

ひるごろ ちゃま でか い けさ じょう いつつう
私は午頃また茶の間へ出掛けて行って、奥さんに、今朝の話をお嬢さんに何時通じてくれる
つもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうとい
うような事をいうのです。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたやうなので、私はそれ
ぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日
でもいい、稽古から帰って来たら、すぐ話そうというのです。私はそうしてもらう方が都合が
いいと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙って自分の机の前に坐って、二人のこそ
こそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち付いていられないような気も
するのです。私はとうとう帽子を被って表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行
き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子を脱
て「今お帰り」と尋ねると、向うではもう病気は癒ったのかと不思議そうに聞くのです。私
は「ええ癒りました、癒りました」と答えて、ずんずん水道橋の方へ曲ってしまいました。

よんじゅうろく
四十六

わたくし さるがくちょう じんぼうちょう とお で おがわまち ほう まが かいわい ある
「私は猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ曲りました。私がこの界隈を歩
くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺れのした書物などを眺め
る気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅の事を考えていました。私に
は先刻の奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありまし

た。私はつまりこの二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡って、明神の坂を上がって、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がって、いびつな円を描いたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考えなかったのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分かりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたとみればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向って書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼はいつもの通り今帰ったのかとはいいいませんでした。彼は「病気はもう癒いのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手を突いて、詫まりなくなりました。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠野の真中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまったのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかったのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉しそうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは大方極りが悪いのだらうとって、ちょっと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮しに掛かりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付で、事の成行をほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それを悉く話されては堪らないと考えました。奥さんはまたそのくらいの事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁護を自分の胸で拵えてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向うには足りませんでした、卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが厭になったのです。